

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい(マルコ 1:15)」。イエスは、鮮やかな譬え話や謎めいた隠喩、底知れぬ愛や実行不可能な戒めを語ったが、これが第一声。

降誕以前から、洗礼者ヨハネは御子の伴走をして来たが、ここでもイエスの姿をくつきり描き出す役割を担っている。

「悔い改めの洗礼を述べ伝える(1:4)ヨハネの許には、「ユダヤの全地方とエルサレムの住民(1:1:5)」が皆やって来た。それほどに民は救いを待ち望んでいて、ヨハネは罪の自覚と悔い改めを求めた。

他方イエスはどうか。「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、福音を宣べ伝えた(1:14)」。エルサレムとガリラヤ、この二つの地域をどう見るか。

イメージすると同じ「悔い改め」でありながら、ヨハネの方向はググッと中心に集中していき、イエスの方向は外側に解き放たれていく感じがする。

「悔い改め」とは、後悔や反省や謝罪というより「方向転換」。だが、両者共に方向転換を要求しながらまったく逆の方位を示すところは興味深い。洗礼者ヨハネの場合は、罪の自覚と洗礼(1:4)によって救済されるのだが、ヘブライ文化の辺境ガリラヤへ向かうイエスの「福音(1:15)」とは何なのか。

「福音=よきおとずれ」とは実際どんなことなのか。イエスはこんな譬えを語る。「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿と一緒にいるかぎり、断食はできない(2:19)」。

「なぜ、あなたの弟子は断食しないのか(2:18)」という非難がましい問いへの答えだが、断食よりも花婿イエスと共にある宴の喜びが重要。続けて「古い布と新しい布(2:21)」と「ぶどう酒と革袋(2:22)」の譬えを語る。

いかなる恵みをも受け取れる柔軟さこそが大事で、与えられる喜びは率直に享受せよ、と。

ではヨハネが伝統的で、イエスは革新的なのか。そうではない。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである(マタイ 5:17)」とイエスは述べた。

エルサレムの硬直した形式から遠ざかり、自然豊かな辺境で、伝統の根本である福音が弾力をもって深められていく。権威なぞあっても古い皮袋のままでは、深まらないだけでなく、福音の力が袋を裂く(2:22)。律法や預言を完成させる福音は、花婿イエスと共にある宴の喜びなのだ。

「悔い改めて福音を信じなさい(1:15)」。福音を信じた私たちは、己もまた古い革袋に劣化すると自戒したい。だから他者との比較ではなく、己自身がここで今「悔い改め=方向転換」し、福音をこの身に迎えたい。

方向転換して新しい革袋となる私たちは、この身で、この心で新しいぶどう酒を醸す。新しいぶどう酒の醗酵力は凄いぞ。私たちの生と死は、永遠なるキリストのものとして醗酵し続ける。またこの醗酵力が教会をも形成する。それを見極める感触は「喜び」かどうか、だ。

「求めよ。わたしは国々をお前の嗣業とし、地の果てまで、お前の領土とする(詩編 2:8)」。イエスは硬直した伝統から遠ざかり、辺境のガリラヤで福音を語った。福音はさらに「地の果て」へ達し、多様な「嗣業の領土」が生じた。

律法と預言の完成形である福音は、民族にも言語にも、社会にも文化にも限定されず、人間の真ん中で「よきおとずれ」として響く。古い革袋だから福音が受け入れられない、と嘆くだろうか。「今日、わたしはお前を生んだ(2:7)」。今日は常に新しく、柔軟なはずだ。



#### 《おまけのひとこと》

悔い改めは革袋を更新する 私という革袋はどんな形状なのか 反芻する胃袋のごとく幾つかに分かれている 醗酵著しい新たな葡萄酒部屋は不可欠だが 落ち着いて古びた葡萄酒部屋も残したい